

前回は、天理教社会福祉の理論的な到達点について、主に渡辺一城と金子昭の先行研究を紹介した。その上で、今回は、本連載の2つの問いから、天理教社会福祉の理論的な課題について検討する。

ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティへの注目

本連載では、「社会福祉からみえる現代社会とは何か」という問いのもとで、福祉国家の成立から新自由主義の影響まで整理してきた。福祉国家は、所得の再分配をベースにして、社会的弱者に対して社会保障を提供する社会システムであるが、その源流の一つとして宗教による慈善活動がある。同志社大学の木原活信は、キリスト教による慈善活動が、近代福祉を確立する上で大きな影響を与えたとし、「宗教的慈善→博愛→社会事業→(厚生事業)→社会福祉」という変遷を辿ると述べる。戦後の日本では、政教分離の原則が強まる中で、社会福祉の源流である宗教性が取り除かれてきた。木原は、これを、宗教と社会福祉の「対話の断絶」と指摘する。

しかし、2000年代以降、福祉国家の見直しの中で、公的責任が後退し、「新しい公共」という形で、NPOや企業など新たなセクターが参入し、宗教と社会福祉の「対話の再開」が起きているとする。木原が、宗教と社会福祉の対話の視点として着目するのが「スピリチュアリティ」である。スピリチュアリティは、様々な定義があるが、宗教を超え、無神論も含める概念であり、人間の実在を包括する概念として位置づけることができる。スピリチュアリティを通じた宗教と社会福祉の「対話の再開」により、ソーシャルワークへのラディカルな問い直しが可能となると指摘する。それは、福祉国家によって、整えてきた権利保障のシステムが、新自由主義政策によって大きく揺らいでいる中で、「他者を支援する」ということの意味や価値への問い直しである。天理教社会福祉活動も、地域社会の社会資源として位置づき、新たな展開を見せる中で、どのような根源的な意味や価値を提供しているのか、その理論化が求められるといえるだろう。

「宗教と社会貢献」の類型

本連載では、もう一つの問いとして「天理教をはじめ宗教における社会福祉活動とは何か」を設定している。関西学院大学の白波瀬達也は、「宗教と社会貢献」の問題点を整理する上で、信仰を前提とした組織 (Faith-Based Organization : FBO) の社会貢献について「布教への関心」と「公的セクターとの協働」という2つの観点から4つのパターンへの類型化をおこなっている (図1)。

I型は、政教分離の原則が強まった戦後では、限定的となる。II型は、布教を重視するため、社会的な活動として認知されにくい。III型は、行政からの支援を受け

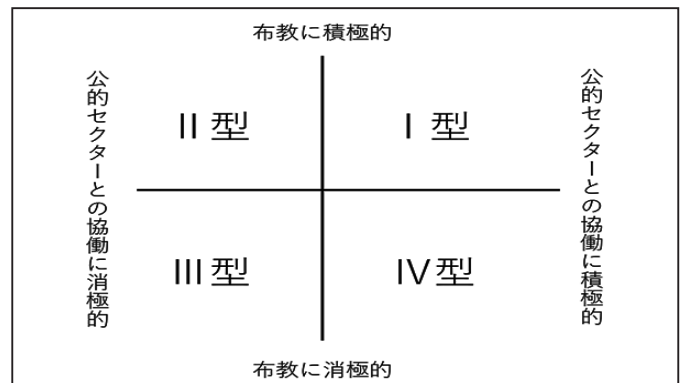


図1 白波瀬達也「FBOによる社会活動の4象限マトリックス」

ず、かつ、布教活動を伴わない社会活動である。天理教では、災害救援ひのきしん隊などを含むことができるだろう。このことによって、活動の裁量度は高く、かつ多種多様な連携を模索することも可能となる。IV型は、公共政策に関わる事業を財政的なサポートを受けながら活動するため、安定的な事業展開が可能だが、一方で公的セクターからの制約も受ける。ここには、天理教の里親活動や施設運営などが含まれる。白波瀬は、この類型モデルは、II型がIII型に移行したり、III型がIV型に移行するなど、動態的に把握されるものであるとする。その上で、「宗教の社会貢献」では、布教を重視しないIII型とIV型に限られるが、II型に分類される活動は「親密な人間関係の形成」や「自尊感情の回復」の機会といった提供がなされているとする。

これまで、宗教の社会福祉活動は、日本では海外に比べて、歴史研究として取り扱われることが多く、実際におこなわれているそうした活動がどのような意味や価値提供を持っているのかの検討がされることは少なかった。しかし、先述したように宗教と社会福祉の「対話の再開」が起きる中で、宗教の社会福祉活動を動的に捉え、その本質や、価値提供を捉えることが今後の課題となる。

今後、本連載では、現在、天理教の教会等でおこなわれている社会福祉活動を具体的に取り上げる。さらに、その背景と取り組みの内容を紹介し、そしてそれらが支援を提供する側とされる側のあいだに、どのような意味をもっているのか、また双方にどのような価値を提供しあっているのかを探っていく。福祉国家の措置制度では、支援する者とされる者の関係は、比較的、固定的だったが、契約制度へ移行し、支援を受ける側への注目が高まった。

近年では、「支援する—される」という関係性を越えて、社会福祉活動が「する側—される側」にどのような影響を及ぼしているのか、という視点での検討が求められている。天理教の場合でいえば、「信仰」と「未信仰」という枠組みを越えた捉え方が必要ということになるだろう。それは、スピリチュアリティという視点かもしれないし、宗教が提供する独自の価値かもしれない。どちらにしても、「天理教の社会福祉活動を通して、どのような『気づき』がもたらされたのか」という新たな問いに迫っていきたい。